

〈国語〉

PISA型「読解力」を育成する指導の工夫 —要旨を踏まえた話し合い活動を通して（第2学年）—

沖縄県立宮古工業高等学校教諭 神 元 有佐枝

I テーマ設定の理由

2003年のPISA調査など各種調査において、「読解力」が課題とされた。PISA型「読解力」は日本での従来の文章の読み取りだけではなく、読んで考えること、読んだことを根拠にして自分の考えを表現することまで含んでいる。平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領では現行の学習指導要領の国語総合の内容に「話題について様々な角度から検討」、「根拠を明確に」、「論理の構成や展開を工夫」が追加されている。さらに現代文Bの内容では「文章を読んで、構成や展開、要旨などを的確にとらえその論理性を評価すること」とある。これは、それまでの学習指導要領の読解力の育成を主眼としつつ、読んだことを根拠にして自分の考えを表現するPISA型「読解力」の育成も含んだものと言える。

平成22年度沖縄県立高等学校入学選抜学力検査概要によると「読むこと」の領域では、平均正答率が32.7%で、平成21年度の63.7%より31.1ポイント下回った。これは、設問の形式が選択問題から記述重視に変わったことが原因として考えられる。学力検査分析では「今後は文章に即して内容を理解する力を育成することや、読み取ったことをもとに自分の考えを述べたり、条件に即して自分の言葉で説明したりする力の育成が一層求められる」という結果がでた。

これまでの授業において、自分の意見を発表する際にその根拠を発表することができない、また、文章の読み取りを行う際においても、どのようにしてこの読み取りになったのかの根拠を示すことができないという生徒が多く見られた。これは、論理的に物事を思考する演習が徹底されてきていない結果ではないかと考える。日常生活の中ででてくる課題について分析・評価し、自分の意見を集団の中で発言することができ、そして、集団の中で話し合い、課題を解決することができる力を育成することは重要である。そこで、日本での従来の「読解力」を育成することはもちろんのこと、PISA型「読解力」を育成するために、文章の要旨を読み取り、その読み取りを踏まえた話し合い活動を行う必要があると考えた。

本研究では、読んで考えたことの根拠を示し表現できる生徒を育成するために、「読むこと」の領域において評論文教材を用い、要旨のまとめ方を押さえ、その要旨を踏まえた話し合い活動を行う。その手立てとして、要旨を把握するためのワークシートや根拠の妥当性等を検討する評価表等を工夫する。話し合い活動を通して、他の生徒の読み取りの根拠や意見を聞くことで、様々な視点や考え方に触れることができ、自らの読みを深めることができると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「読むこと」の領域において、評論文教材を用い、要旨を踏まえた話し合い活動を行うことにより、読んで考えたことの根拠を示し表現するPISA型「読解力」を育成することができるであろう。

II 研究内容

1 PISA型「読解力」について

OECDの調査したPISA型「読解力」は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力」と定義されている。国語教育指導用語辞典によると「読解」とは、「文章（テキスト）に接触し、文章に内包された情報を、読者と書き手が共有するコード（文章表現の規則や約束事）と読者に既知の知識・情報および経験とを手がかりとしながら解読し、それを理解し、解釈するに至る、読者の一連の行為を指す概念」とある。広辞苑において「読解」とは、「文章を読んでその意味を理解し、解釈すること」とある。以上のことから、「読解力」とは、「文章を読んで内容（情報）を理解し、解釈する力」と捉えられ、この日本従来の「読解力」はOECDによって実施されたPISA調査において定義されている「読解力」とは意味するところが異なるので、文部科学省「読解力向上プログラム」では、PISA調査の読解力をPISA型「読解力」と表記し、区別している。PISA型「読解力」は文章や資料から「情報を取り出す」ことに加えて、「解釈」、「熟考・評価」、「論述」することを含むもので

あり、4つの特徴（表1）を有している。

表1 PISA型「読解力」の特徴

- ① テキストに書かれた「情報の取り出し」だけではなく、「理解・評価」（解釈・熟考）も含んでいること。
- ② テキストを単に「読む」だけではなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含んでいること。
- ③ テキストの「内容」だけではなく、構造・形式や表現法も、評価すべき対象となること。
- ④ テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく、図、グラフ、表などの「非連続型テキスト」を含んでいること。

PISA調査の「読解力」の結果から、読解のプロセスにおいては「テキストの解釈」、「熟考・評価」、出題形式においては「自由記述」の問題に課題があることが明らかになった。有元秀文（2008）のPISAの読解のプロセス（図1）でも示されているように、PISA型の読解で大切なことは、本文の正確な理解と読んだことを根拠にした「解釈」と「独自の意見を述べること」にある。

自分の考えを根拠をもって説明したり表現したりする能力は、これからの国際社会で活躍していくためには必要な能力である。そこで、PISA型「読解力」の育成に焦点をあて取り組んでいく。

文部科学省から発行された『読解力向上に関する指導資料』（2006）において、各学校で求められる改善の具体的な方向として3点の重点目標（表2）が示されている。

表2 「読解力」向上の重点目標

- 目標① テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実
- 目標② テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実
- 目標③ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

表2の重点目標を受けて、「読解力」を育成するため、以下の3点について学習目標、学習教材に合わせて指導を重点化し、適宜取り入れていく必要があると考える。

- (1) 教科書の本文の読み取りだけでなく、読んだことを根拠にして意見を述べたり、書いたりする機会を増やす。
- (2) 書かれている内容に対して、評価したり、批判したりする視点を持たせる。
- (3) 様々な文章に触れるために、学校図書館等を活用し、読書する機会を増やす。

本研究では、評論文教材を用いて(1)の項目に取り組む。

2 PISA型「読解力」を育成するための指導展開

これから社会に出て行く生徒に、自分の意見を集団の中で表現できる力を育成することは大切である。意見を他者に伝えるには、その表現が論理的なものでなければならない。有元は、国際社会で必要な論理的な表現の基本について3点挙げている。

- (1) 「だれが聞いても納得するような理由と根拠」を挙げて、意見を書くこと。
- (2) 意見がふらふらと変わらないで、終始一貫していること。
- (3) 意見が飛躍せずに、論理的につながりよく展開すること。

それらを基に本研究では、評論文教材を用いて要旨をまとめる学習を行い、筆者の主張に対する意見文を書く。そして、書いた意見を基に話し合い活動を行い、それを踏まえて再度意見文を書く授業を行う（図2）。そのことにより、だれが聞いても納得できるような理由と根拠を挙げた意見が書けるようになるのではないかと考える。

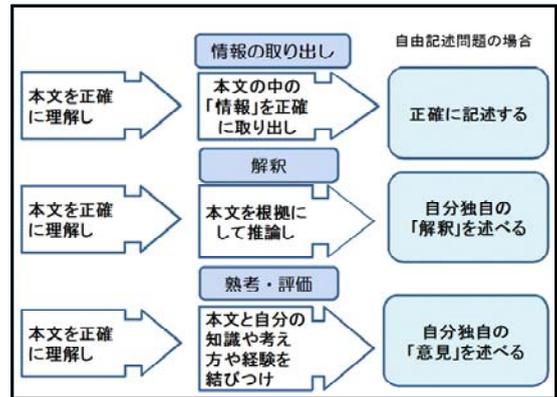


図1 PISAの3つの読解プロセス（有元）



図2 PISA型「読解力」育成のための指導展開

3 要旨について

筆者の主張に対して意見を述べるには、本文の正確な理解が必要であり、そのために要旨をまとめる学習を行う。

学習指導要領の解説では「要旨」について、「書き手による構成や展開の仕方をたどりながら、その文章の『要旨など』、すなわち書き手や文章中の人物のものの見方、感じ方、考え方など、書き表そうとした中心的な内容を間違いなく把握することが大切である。」としており、要旨をまとめることの重要性が記されている。

国語教育指導用語辞典によると「要旨」とは、話し言葉や書き言葉の中心（要）となる内容を示し、特に説明・論説などの中心になる大事な内容とある。また、「要旨」は、そこに述べられている説明・談話の趣旨であり、要旨をまとめるとき、そこには、話し手や書き手が最も表現したい中心となる内容が含まれていなければならない。逆に、聞き手や読み手が、要旨をとらえることは、内容を的確に把握することになり、その要旨のまとめ方として大きく3つに分けられるとしている（表3）。

本研究では、本文の中心的な内容を押さえる演習として、表3の②の要旨のまとめ方を参考

にする。②の要旨のまとめ方として、国語教育指導用語辞典では、「中心となる内容は、文章中の中心文（その段落の中心的な内容を端的に示す文）を基にまとめる。中心文は、主に各段落単位での表現から抜き出す。しかし、各段落の表現内容は、文章全体の構成や展開上、文章全体の中心文とはならず、それぞれの段落の内容のみを示すこともある。そこで文章全体の中の中心文を読み取り、見つけることが重要である」とある。

その要旨のまとめ方として、まず各段落の中心文を押さえて、要点（段落で筆者が主張したいこと）をまとめる。そして、文章構成を押さえるなかで、結論部分を確認する。最後に、結論部分を中心に、各段落の要点を加えて、要旨をまとめていく。この要旨のまとめ方の流れを理解するために、本研究では、要旨をまとめるためのキーワードや文章構成等を押さえたワークシートを工夫していく。

具体的には、資料（図3）を用いて、キーワードや要旨のまとめ方についての学習を評論文の内容読解前に行う。そして、評論文の教材を初読する際に、生徒にキーワードや筆者の主張だと感じたところに線を引かせ、ワークシート（図4）に記入させる。そのことにより、初読の段階で、文章の概要や筆者の主張を意識しながら読むことができる。次に各意味段落の内容読解後に文章のキーワード

表3 要旨のまとめ方（『国語教育指導用語辞典』による）

- ① 文章中の用語をそのまま用いて、文章全体を短く言い換えたもの。
- ② 文章全体の文意を損なわないよう、中心となる内容をまとめて直したもの。
- ③ 読み手が自分なりに読み取った文章の内容を、再構成してまとめ直したもの。

図3 資料「要旨をまとめるためのポイント」

図4 ワークシート「キーワード・筆者の主張」

図5 ワークシート「要旨のまとめ」

を確認する。全文の内容読解後は文章の構成、筆者の主張、各段落の要点を押さえ、ワークシート（図5）を用いて、要旨のまとめ方を確認する。

4 意見文について

(1) 話し合い活動前の意見文

要旨をまとめた後、筆者の主張に対する自分の意見をまとめる学習活動を行う。その際には、2点の注意を行う。「筆者の主張に対する自分の立場を明らかにすること」、「意見を支える根拠を必ず入れること」、この2点を踏まえた上で、意見文を書く学習を行う。この段階では、論理的に表現するための具体的な指導等は行わず、話し合い活動後に資料等を提示し、指導する。

生徒は、「根拠」を明らかにした意見を書く（述べる）ことを苦手としている現状がある。これは、それまで、根拠を意識して自分の意見や考えを述べる演習が徹底されてきていない現状からきていると考えられる。そこで、意見には誰もが納得する根拠が必要であることを自覚させ、実際に根拠のある意見を表現できるようになるために、意見文を書いた後に話し合い活動を行う。そのことによって、自分の意見がどの相手でも納得できるものであるか、根拠は妥当であるか等について見直し、「根拠」や相手に伝えるための留意点を意識できるのではないかと考える。

(2) 話し合い活動後の意見文

話し合い活動の振り返りをした後、「論理的に表現するための視点」（表4）の説明を行い、「論理的に表現するための文章構成例」（表5）を根拠の示し方の一例として紹介する。その後、話し合い活動で出た意見や「論理的に表現するための視点」、「論理的に表現するための文章構成例」、相互評価表を基に、改めて筆者の主張を踏まえた意見文を書く。

話し合い活動で自らの意見の論理性を見直した後、意見を書く際に、「論理的に表現するための視点」等を確認することで、根拠を示しながら自分の意見が述べられているかを意識して書くことができるようになる。

表4 資料「論理的に表現するための視点」

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 筆者の主張を踏まえ、まとめているか。 ② 自分の立場を明らかにしているか。 ③ 意見が飛躍せず、論理的に展開しているか。 ④ 根拠を挙げて意見をまとめているか。 |
|---|

表5 資料「論理的に表現するための文章構成例」

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 本文（筆者の主張）に対する自分の意見・考えを明確に示す。 ② ①のように考えた理由 ③ 自分と反対の立場に立った意見の検討とその否定
（確かに○○という考え（意見）もある。しかし、○○ではないか）
→自分の主張と違う立場に立ち、それを踏まえたうえで、自分の正当性を主張する。（反論を論破） ④ まとめ <p>文章の配分 ① 10%～20% ②③ 60%～80% ④ 10%～20%</p> |
|---|

5 話し合い活動について

(1) 「話し合い」の有効性

中原國明・大熊徹（2006）は、「話し合い」活動の意義として以下の7点を挙げている。

- ① コミュニケーションの精度が高くなる。正確さが増す。
- ② 対等な立場での、民主的なコミュニケーションが成立する。
- ③ 他者の存在を認め、自己に対する認識が確実になり、相互理解が深まる。
- ④ 協働生産を成し遂げる。
- ⑤ 論理的に思考する力を鍛え、ものの見方、考え方を鋭くさせる。
- ⑥ 他者の視点を想定し、ものの見方、考え方を広げる。
- ⑦ 説得の言い方、聞き方を身につける。

このように話し合い活動は、生徒が集団の中で、自己の考えを根拠を示しながら述べる演習として有効的な手段である。さらに、様々な視点や考え方に触れることにより、浅い理解からより深い理解につなげる効果がある。しかし、この話し合い活動をより効果的に行うには、相手の意見を真剣に聞くという姿勢づくりをしなければならない。また、全員が発言できるように配慮し、さらに、自分の意見を他の意見に同化したりしないように指導していく。

(2) 「話し合い活動メモ」について

本研究では、話し合い活動を行う際に出た意見や質問したいことなど、発表を聞きながら記入するためのワークシートとして、「話し合い活動メモ」（図6）を使用する。

話し合い活動は、5人1グループで行う。

〈話し合い活動の流れ〉

- ① 発表時間:一人当たり2分
- ② 話し合い活動メモと相互評価表をまとめる時間:1分
- ③ 意見交流:4分

意見交流は以下の3点に留意して行う。

- ア 相手の意見を踏まえて、自分の意見を言う。
- イ 疑問に思ったこと、気になったことを聞く。
- ウ 意見の根拠が述べられていない場合は根拠を聞く。

このように意見交流のポイントを絞ることで、生徒が根拠の有無や妥当性を意識できるのではないかと考える。また、意見交流の留意点の提示は、意見を深めることや何を質問すればよいか分からない生徒に対しての手助けにもなると考える。話し合い活動を行う際の説明において、意見交流での質問は、質問される側の意見を深めることにつながる大切なものになるということを生徒に伝え、互いの意見を深めるためにも相手の意見をしっかりと聞くように指示する。そのことにより、真剣に相手の意見を聞くという姿勢につながるのではないかと考える。さらに、話し合い活動では、進行役を立て、全員が発言できるように配慮させる。

この「話し合い活動メモ」を用いた話し合い活動を行うことで、様々な見方・考え方に触れることができ、自らの意見や根拠の妥当性を見直すことができる。そのことにより、自らの意見を深めることができると考える。

6 相互評価について

瀬川榮志 (2007) によると、相互評価の意義は「友だちの学習内容の評価を通して、長所・短所を発見するとともに、自己の学習方法の反省や新しい方向性を見定めることにつながるができる。」としている (図7)。

そこで、本研究では、「他者から自分の意見がどのように評価されているかを知る」、「他者を評価することで、自分自身が意見を述べる際にも論理的に物事を表現することを意識できるようにする」、「聞き手 (読み手) を納得させるための留意点や根拠の妥当性を考える際の手助けにする」、の3点をねらいとして相互評価を取り入れる。

具体的には、話し合い活動の中でグループの構成員が意見を述べている際に、相互評価表 (図8) を用いて4つの項目について評価を行う。相互評価表は、評価後に評価者から受け取り、話し合い活動後、改めて意見を書く際の参考にする。

III 指導の実際

検証授業は沖縄県立普天間高校にて実施した。

1 単元名「5 評論③ ハイテク化と人間のゆくえ」

2 単元の目標

- (1) 現代社会の問題を扱った評論を読んで、話題の核心と論旨を的確に読み取る。
- (2) 筆者の論点を踏まえて、科学技術と人間や文化のあり方について深く考える。

3 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 読む能力	ウ 知識・理解
①文章を読むことを通して、人間、社会、自然などについて自分の考	①文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえることができる。	①語彙の意味、用法を的確に理解している。

「ハイテク化と人間のゆくえ」(養老孟司) №1

話し合い活動メモ		年 組 番 氏名
① 氏名 賛成・反対意見 質問したいこと・気になったこと 話し合いを促して思ったこと等	賛成か反対か○をつける 質問したいこと・気になったこと 思ったことをメモする	賛成意見 発表者の意見をメモする 質問し 話し合いを促して思ったこと等
② 氏名 賛成・反対意見 質問したいこと・気になったこと 話し合いを促して思ったこと等	質問したいこと・気になったこと 思ったことをメモする	賛成・反対意見 質問したいこと・気になったこと 話し合いを促して思ったこと等
③ 氏名 賛成・反対意見 質問したいこと・気になったこと 話し合いを促して思ったこと等	【発表の流れ】 1発表時間:一人あたり2分 2メモと相互評価表をまとめる時間:1分 3意見交流:4分 【意見交流のポイント】 1相手の意見を踏まえて、自分の意見を言う。 2疑問に思ったこと、気になったことを聞く。 3意見の根拠が述べられていない場合は根拠を聞く。	
【自己評価】 1 自己の意見と他者の意見の共通点や相違点に注意して話し合い活動ができた。 A できた B だいたいできた C あまりできなかった D できなかった 2 根拠を示しながら自分の意見を述べることができた。 A できた B だいたいできた C あまりできなかった D できなかった		

図6 ワークシート「話し合い活動メモ」

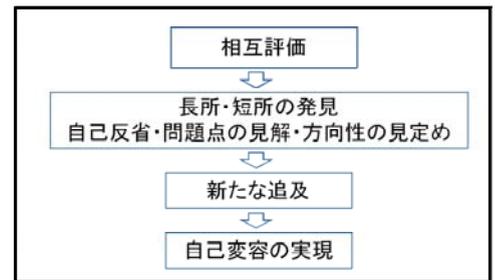


図7 評価の実際

相互評価表		被評価者	評価者
4 A ある B ややある C なし	3 A 展開している B やや展開している C 展開していない	2 A 述べている B 述べていない	1 A 明らかにしている B 明らかにしていない
4 根拠に妥当性はあるか。		1 自分の立場を明らかにしているか。	
3 意見が飛躍せずに、論理的に展開しているか		2 根拠を挙げて意見を述べているか。	

図8 相互評価表

えを深めたり発展させたりしようとしている。 ②自ら進んで意見交流に参加しようとしている。	②文章を読むことを通して、自らの考えを深めたり発展させたりすることができる。
---	--

4 指導計画と評価計画 (全8時間)

時	学習活動	指導上の留意点	学習形態	評価方法	評価規準
1	<ul style="list-style-type: none"> 要旨の押さえ方を学習する。 キーワードと筆者の主張を押さえる。 筆者に対しての自分の立場を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> キーワードの見つけ方について説明する。 本文のキーワードや筆者の考えだと思った文章に線を引かせる。 ペアで、各自で押さえたキーワードを比較させる。 筆者の考えに対する是非を考えさせる。 	全体 個人 ペア 個人	活動観察 ワークシート「キーワード・筆者の主張」	イ② ウ①
2	<ul style="list-style-type: none"> ハイテク社会の「時間」と「空間」について読み取る。 なぜ「予測化が進むと時間が速くなる」のかを読み取る。 「都市」と「自然」を比較し、ハイテク社会について読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 筆者の問題提起に対する見解を追わせながら読解させる。 1段落のキーワードを押さえさせる。 ペアで、「都市」と「自然」の違いを確認させる。 	一斉 ペア	内容読解ワークシート	イ①
3	<ul style="list-style-type: none"> ハイテク社会の「基本的な考え方」を読み取る。 ハイテク社会を基礎づけている思考「予測性」を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 得体の知れない「科学」と科学「技術」という表現にはどのような意味が込められているか押さえさせる。 	一斉	内容読解ワークシート	イ①
4	<ul style="list-style-type: none"> ハイテク社会の「構造」を読み取る。 著者が「ハイテク社会」とはどのような社会だと捉えているか読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 新皮質もヒトの脳の一部であり、脳全体の機能ではないことを押さえさせる。 	一斉	内容読解ワークシート	イ②
5	<ul style="list-style-type: none"> ハイテク社会の「方向性」「限界」「反省すべき点」を読み取る。  <p>写真1 授業風景</p>	<ul style="list-style-type: none"> ヒトは新皮質だけでは生きられないことを押さえさせる。 2段落のキーワードを押さえさせる。 ハイテク化は「予測・統御不能」なものにたどりつくことを押さえさせる。 第3段落のキーワードを押さえさせる。 	一斉	内容読解ワークシート	イ②
6	<ul style="list-style-type: none"> 各段落の要点と筆者の主張を押さえ、要旨をまとめる。 筆者の主張を踏まえて、自分の意見を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 要旨のまとめ方を再度確認させる。 意見を書く際には、「筆者の主張に対する自分の立場を明らかにする」、「意見を支える根拠を必ず入れること」、この2点を踏 	一斉	ワークシート「要旨のまとめ」「意見文」	ア① イ①

		まえた上で、意見文を書くように指示する。			
7 (本時)	○話し合い活動を通して、自分の考えを深める。 ・相手の意見の根拠の妥当性を考える。	・話し合い活動の流れを説明し、「話し合い活動メモ」と「相互評価表」を意見聞きながら記入するように指示する。 ・論の進め方や根拠に注意して意見を聞くように注意する。	グループ	ワークシート「話し合い活動メモ」 活動観察	ア② イ②
8	○話し合い活動を踏まえて、自分の考えを深める。 ・各グループの代表者が、話し合い活動で意見等を全体で紹介する。 ・話し合い活動や、「論理的に表現するための視点」、「相互評価表」を基に改めて自分の意見文を書く。	・話し合い活動や、「論理的に表現する視点」、「相互評価表」を基にしながら自分の意見を書くことを伝える。	一斉 個人	ワークシート 活動観察	ア① イ②



写真2 意見文を書く様子

5 本時の指導 (7 / 8時間)

(1) 本時の目標

話し合い活動の中で自らの考えを深めことができる。

(2) 授業仮説

筆者の主張を踏まえた自らの意見を書き、その上で話し合い活動を行うことによって、論理的な意見をまとめることができるようになるであろう。

(3) 本時の重点的指導事項

話し合い活動において、他者の意見を聞き、その根拠の妥当性等を評価することや話し合い活動後に自分の意見を再度見直すことにより、論理的な意見をまとめることができる。

(4) 準備

「相互評価表」(一人当たり4枚)、「話し合い活動メモ」、「論理的に表現するための視点」

(5) 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	学習形態	評価方法	評価規準
導入七分	1 前時の確認	・筆者の主張を踏まえた意見になっているか、根拠のある意見になっているか等を確認させる。	全体	ワークシート「意見文」	
展開四二分	2 話し合い活動 ①個人の発表(2分) ②「話し合い活動メモ」「相互評価表」の記入(1分) ③意見交流(4分) (①~③×5人)	・進行役とグループ代表を決める。 ・話し合い活動の流れを説明する。 ・「話し合い活動メモ」と「相互評価表」の記入方法を説明し、意見を聞きながら記入するように指示する。 ・意見交流のポイント3点を説明する。 ①相手の意見を踏まえて、自分の意見を言う。 ②疑問に思ったこと、気になったことを聞く。 ③意見の根拠が述べられていない場合は根拠を聞く。 ・グループで話し合い活動を行わせる。(5人×8グループ)	グループ	発表・観察 ワークシート「話し合い活動メモ」 活動観察	ア② イ②
まとめ	学習のまとめ	・次時の予告 ・グループの意見と話し合いを			



写真3 話し合い活動の様子

6 仮説の検証

「読むこと」の領域において、評論文教材を用い、要旨を踏まえた話し合い活動を行うことにより、自分の意見を根拠を挙げて表現するPISA型「読解力」を育成することができたかを、事前事後のアンケートや生徒の意見文の分析を基に考察する。

(1) 要旨に関するアンケートからの考察

検証授業の事前アンケート（N=40）では、「評論文の授業において要旨のまとめ方を学習したことがありますか」という質問に対して「ある22人（55%）」、「ない18人（45%）」という結果がでた。要旨のまとめ方について、小学校から学んできているのにもかかわらず、45%の生徒が「学習したことがない」と回答していることから、要旨についての学習が定着していないと考える。そこで、「要旨のまとめ方」についての授業を行った。その結果、検証授業後の事後アンケート（N=36）では、「要旨のまとめ方を理解することができましたか」という質問に対して「できた15名（43%）」、「ややできた18名（51%）」、「あまりできなかった2名（6%）」、「できなかった0名」という結果がでた。

「要旨を押さえるためのポイント」等のワークシートを使用し、「キーワード」の押さえ方等を学習した上で、内容読解後に要旨のまとめ方を再確認することによって、9割を超える生徒が「要旨のまとめ方」を理解することができたと考える。

(2) 要旨を踏まえた話し合い活動に対するアンケートからの考察

検証授業後の「話し合い活動で自己の考えを深めることができましたか」（図9）という質問に対して「できた35名（97%）」、「ややできた1名（3%）」と生徒全員が話し合い活動によって自分の考えを深めることができたという肯定的な結果となった。その理由として、「みんなの意見を聞き、自分の意見を発表することでいろんな視点から物事を見ることができた」、「違う視点からみえるようになった」、「他人の意見に触れたり、質問されることによって自分では気づけない欠点に気づけた」が生徒から挙げられた。

話し合い活動で多様な考え方に触れることで、複数の視点から物事を見ることができるようになり、意見の根拠やその妥当性等について質疑応答を通して、自分の考えを深めることができたと考える。

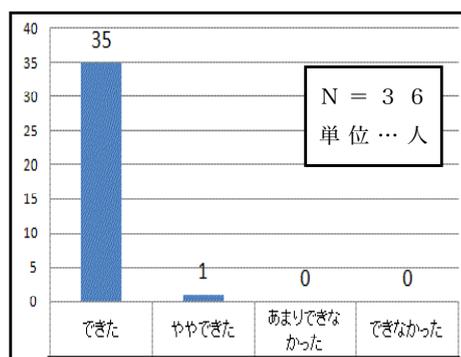


図9 話し合い活動で自分の考えを深めることができましたか。

(3) 意見をまとめるための手立てに対するアンケートからの考察

検証授業後の「相互評価表や論理的に表現するための視点等は話し合いや意見をまとめる際の参考になりましたか」（図10）という質問に対して、「参考になった29名（81%）」、「やや参考になった7名（19%）」という結果がでた。その理由として、「最初に書いた自分の意見をどのように直せば、より相手に伝わるかということがちゃんと分かった」、「どこをどう工夫すれば、分かりやすくなるのか、自分で評価したり、周囲の意見を取り入れたりすることで、意見がまとめやすくなった」が生徒から挙げられた。

「相互評価表」「論理的に表現するための視点」等を参考にすることにより、自己の意見の論理性を見直し、根拠のある意見をまとめることができたと考える。

(4) 根拠に基づいた意見文に対するアンケートからの考察

「最後の意見文では、根拠を示しながら、自分の考えや意見を書くことができましたか」（図11）という質問に対して、「できた16名（44%）」、「ややできた20名（56%）」という結果がでた。その理由として一番多く挙げられたのが、「最初の文より根拠を

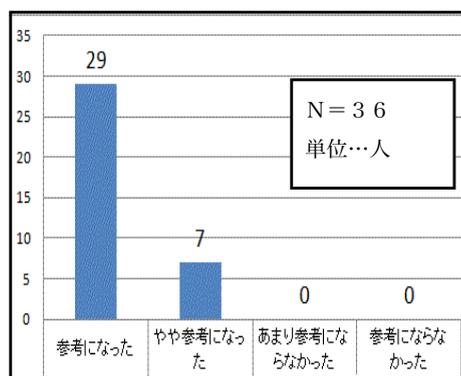


図10 相互評価表や論理的に表現するための視点等は話し合いや意見をまとめる際の参考になりましたか。

明らかにできたと思う」だった。その他に、「根拠を考えて文全体を構成することが意外に難しかった。でも、1週間前より大いに進歩したと思う」、「話し合いで話したことや、質問されたことが役に立った」、「みんなにいろいろと質問されることで、自分の矛盾点に気づいた」、「うまく書くポイントがしっかり書かれている紙があったから」という理由も挙げられた。

話し合い活動や意見をまとめるための手立てである「論理的に表現するための視点」等によって、意見を支える根拠を意識して意見を書くことができたと考える。

(5) 意見文の比較分析による考察

話し合い活動を行う前後の意見文を根拠の有無に主眼を置いた基準(表6)で分析、検証する。

話し合い活動を行った前後の文章を比較すると、A評価とB評価の根拠を示して自分の意見を書いた生徒が話し合い活動前(N=36)は21名(58%)だったのに対して、話し合い活動後は、29名(81%)となり、23ポイント上昇した。特にA評価の文章が話し合い活動前は3名(8%)だったのに対して、話し合い活動後は19人(53%)と、事前事後では45ポイント上昇の変化が見られた(図12)。

話し合い活動前の意見文では、筆者の主張の根拠のみを拠り所にして意見を述べている生徒がいた。しかし、話し合い活動後は、筆者の主張に賛成の立場の意見であっても、自分なりの根拠を加えて意見を書いている生徒が増えた。また、複数の具体例を挙げて様々な角度から自らの主張をまとめている生徒や、対立する意見に対しての反論の理由も含めて書いている生徒(図13)も増えた。

話し合い活動において、意見を交流することで、他者の見方・考え方に触れることができ、自らの意見の矛盾点や根拠の妥当性の有無等に気づくことができた。また、「相互評価表」、「論理的に表現するための視点」等を参考にすることで、根拠のある意見をより意識して書くことができたと考える。

生徒の感想(表7)からも、話し合い活動を行うことで、根拠を意識して書くことや自分の考えを深めること

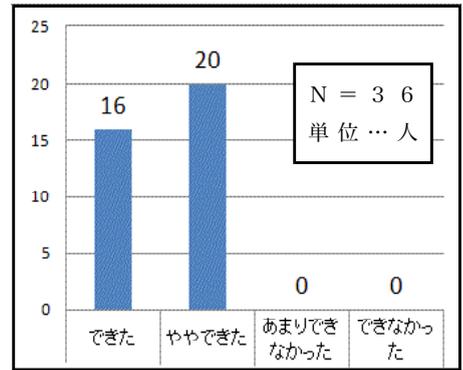


図11 最後の意見文では、根拠を示しながら、自分の考えや意見を書くことができましたか。

表6 意見文の評価基準

A…複数の視点で根拠を述べている。 または、対立する意見の考察を書いている。
B…自分なりの根拠を述べている。(1例以上)
C…自分なりの根拠を述べていない。(筆者の主張を繰り返している) または、根拠に妥当性がない。

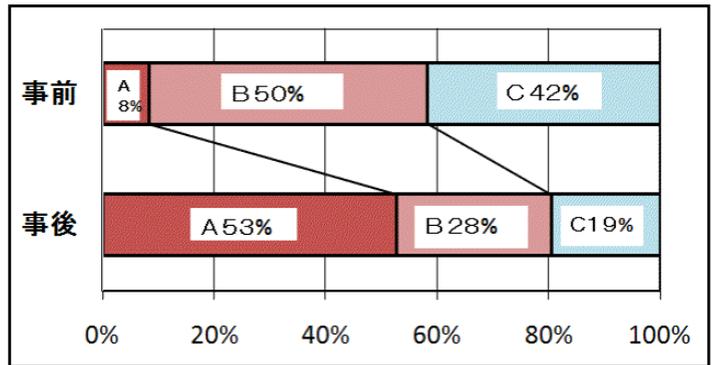


図12 話し合い活動後の生徒の意見文

対立する意見に対する反論

意見に対する根拠が挙げられている。

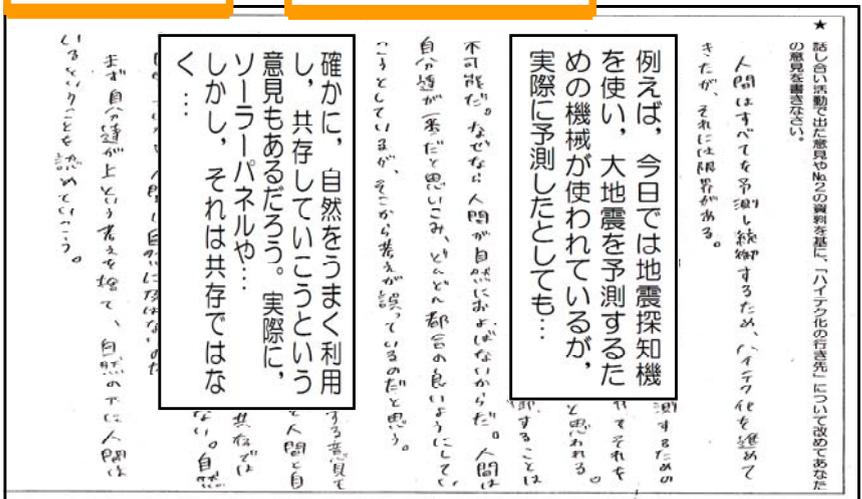


図13 話し合い活動後の生徒の意見文

ができた実感したことが分かる。

表7 授業を通しての感想

- ・話し合いは、自分の考えを深められてプラスになりました。また、考え方が変わったりして違う視点で見れるようになりました。
- ・みんなと意見を交換して、自分とは違う考えや別の立場の根拠など、自分にはないことをいろいろ学べたし、視野が広がってとても楽しかったです。
- ・全員で意見を交換し合うのは、それなりに自分の考えを明確にしないとイケないし、他の人の意見も知ることができるから、いろいろな点でためになると思った。
- ・グループで話し合う時に、自分の考えをうまく言葉にして伝えるのが難しかったけど、皆が優しくて一生懸命話を聞いてくれて嬉しかった。社会に出ると、自分の意見を言わないとイケない場が増えてくると思うので、今日の経験ができて本当によかった。
- ・根拠を示したり、要旨をまとめるスキルが少し上がったと思います。
- ・私は現代文が苦手で、とくに要旨をまとめたりするのが苦手です。今回の授業で前よりはできるようになったかなと思います。
- ・内容把握が自分なりに前より出来て、「書く」ことによって脳の中に言葉・キーワードがインプットされやすくて、よかった。

IV 成果と課題

本研究は「PISA型『読解力』を育成する指導の工夫」をテーマとし、要旨を踏まえた話し合い活動を通して、読んで考えたことの根拠を示し表現するPISA型「読解力」を育成するための研究を進めてきた。その成果と課題をまとめる。

1 成果

- (1) 話し合い活動において、「話し合い活動メモ」や「相互評価表」等を取り入れることで、根拠を踏まえた意見文や対立する意見の考察も含めた意見文が増え、PISA型「読解力」を育成することができた。
- (2) 「論理的に表現するための視点」や「相互評価表」等は、自分の意見を相手に伝える際の留意点が多分分からなかった生徒にとって、論理的な意見を書く際の参考になった。
- (3) 資料「要旨をまとめるためのポイント」等を使用し、キーワードに注意しながら内容読解を行った結果、要旨のまとめ方を理解できた生徒が増えた。

2 課題

- (1) 話し合い活動において、同一の意見（筆者の主張に賛成）だけで構成されたグループがあった。それぞれ根拠の異なる意見であったため意見の深まりはあったが、今後グループ編成方法についての分析も必要であると考えられる。
- (2) 今回は、要旨に関してまとめる方法についての学習を行った。今後は、各单元ごとに自分自身で要旨をまとめられるように継続的に指導していく。
- (3) 評論の分野だけではなく、どの分野においても、自分の意見を根拠を挙げて表現できるように指導していく。

〈主な参考文献〉

- 有元秀文 2008 『必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革』 明治図書
瀬川榮志 2007 『これだけは身につけたい国語科基本用語』 明治図書
中原國明・大熊徹 2006 『実戦へのヒント 国語科授業用語の手引き』 教育出版